

開催日時・場所
令和元年（2019年）7月23日（火）15時00分～17時00分 滋賀県庁北新館5-A会議室
出席委員
井手委員、清水委員、田中賢治委員、田中克委員、津野委員、西野委員、平山委員、堀越委員、脇田委員（欠席：佐野委員）
主な内容
・マザーレイク 21 計画の指標を整理し、琵琶湖の状態を把握するための資料である「びわ湖なう 2019～指標でみるびわ湖と暮らしの過去・現在～（案）」および来年度に終期を迎えるマザーレイク 21 計画の「ふりかえり報告書（素案）」について、内容の妥当性と効果的な編集に関するご意見を頂いた。
主な意見
■「びわ湖なう 2019」について <ul style="list-style-type: none">・4 ページの評価結果の最後に「不健全な状態にあり、その解決のためには、より総合的な視野に基づくアプローチ」とあるが、もう少し具体的な表現にしたほうが理解していただきやすいのではないか。・5 ページの表の各カテゴリーの評価の説明についてもう少し言葉を増やしてはどうか。「水の清らかさ」に関する指標も2～3つに分けたほうがよいのではないか。・14 ページにあるような漁師のインタビュー記事が入ってくるのは非常に効果的だと思う。何気ない観察、経験ということがいろいろな環境問題で重要だと思うので、敏感に対応していく、調べていくということが大切なのではないか。・39 ページ年表の「川で遊ぶ子どもや魚取りをする人たちの減少」というような生活の深い実感や身体的な感覚に結び付いた事象は、指標化が難しいが、重要だと思う。 ■「ふりかえり報告書（素案）」について <ul style="list-style-type: none">・琵琶湖を巡る歴史的、社会的背景を付け加えると奥行きが出ると思う。・琵琶湖を取り巻くツーリズムに関してもう少し書き込んでほしい。・我々が対象にしている水質の項目は、果たして琵琶湖の状態を表しているのか、今の項目以外に変化が生じているのだとしたら何で表したらいいのか考えている。・2050年のあるべき姿の中身が出てきておらず、そこが明確にならないと第2期計画の評価もできないと思うが、琵琶湖に在来の生き物が前よりもずっと増えるということが2050年のあるべき姿、総合的な指標になるのではないか。・川に水が流れないということや地下水も含めて、そういう陸域と湖との関係をちゃんと捉え直すということも考えないと琵琶湖の再生はできないのではないか。
今後の方向性
・「びわ湖なう 2019」については、さらにわかりやすく琵琶湖の現状を伝える資料となるよう記載内容や表現方法等を工夫する。 ・「ふりかえり報告書（素案）」については今後編集作業を進めるとともに、マザーレイク 21 計画の今後の方向性について多様な主体により検討していく。

マザーレイク 21 計画学術フォーラム 委員名簿

五十音順（敬称略）

	委員名	専門 研究分野	所属、役職	備考
1	井手 慎司	住民活動論	滋賀県立大学環境科学部 教授	
2	佐野 静代	地域環境史	同志社大学文学部 教授	
3	清水 芳久	環境質管理	京都大学大学院工学研究科附属 流域圏総合環境質研究センター 教授	
4	田中 賢治	水文・水資源工学	京都大学防災研究所附属 水資源環境研究センター 准教授	
5	田中 克	魚類生態学	京都大学 名誉教授	
6	津野 洋	水環境工学	京都大学 名誉教授	
7	西野 麻知子	生物多様性保全	元びわこ成蹊スポーツ大学 スポーツ学部 教授	
8	平山 貴美子	森林生態学	京都府立大学大学院 生命環境科学研究科 准教授	
9	堀越 昌子	食環境学・食文化	京都華頂大学現代家政学部 教授	
10	脇田 健一	地域社会	龍谷大学社会学部 教授	